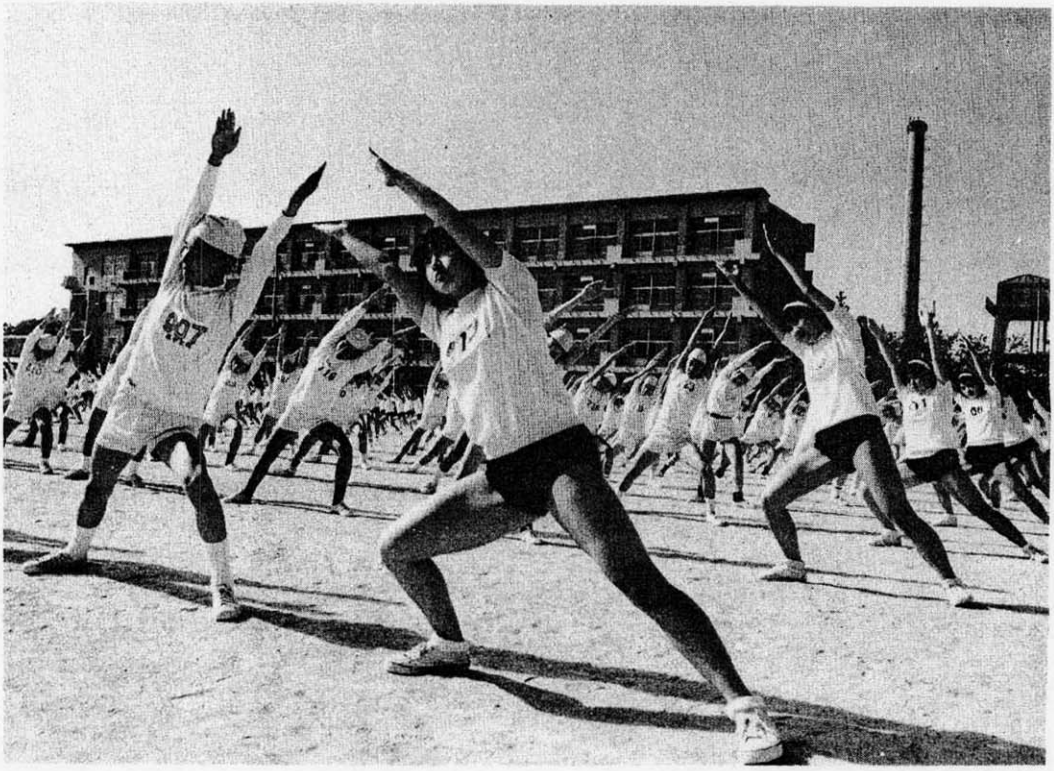
昭和49年5月10日／編集・発行／岡崎市教育委員会

天は自ら助くるものを助く

限りない前進をめざして、さわやかな五月の青空を泳ぐ鯉のぼりのように、力強く、毎日のたゆまない努力を、積み重ねて行きたいものです。

岡崎市教育委員
永屋　満



（南中体操 － 全校体育 － 南中）

行解相応

平井俊龍

道元禅師は、その立教開宗の宣言ともいうべき「弁道話」の中で、

「仏法には、修証これ一等なり。いまも証上の修なるゆゑに、初心の弁道すなはち本証の全体なり。かかるがゆゑに、修行の用心をさづくるにも、修のほかに証をまつおもひなかれとおしふ、直指の本証なるがゆゑなるべし。すでに修の証なれば、証にきはなく、証の修なれば、修にはじめなし。云々」といっている。

ここにいう「修」とは修行、証は証悟（さとり）である。この修と証との関係について、普通一般的には、修行を積み重ねていって、その結果として証悟を得るというように考えられている。つまり、証悟は窮極の目的であって、修行はそれに至るための手段方法であると理解している。これに対し、道元の主張するところは、修と証とは同じ一つのものだということである。正真の修行のおこなわれるその時、そのところに証悟が現実に成就しているというわけである。真の修行にうちこんでそのものになりきれば、それがそのまま証悟のすがたである。なにも、ものほしそうに証悟を期待するようなさもしい料簡を起こすなとの教えである。いわゆるこの「修証一如」の教えは、道元の主張した最も重要な思想である。

さきに引用した文章の中にも「修の証」「証の修」などのことばも出ているが、修証一如の思想から「本証妙修」などともいわれ、さきの文章につづいて「妙修を放下すれば本証手の中にみてり、本証を出身すれば、妙修通身におこなはる。」などの表現もある。

金剛石だからこそ、磨けば玉として輝くのであって、瓦はいくらこれを磨いても鏡にはならない。お互いも本質的に仏になる素因をもっていればこそ、修行によって仏になることもできるわけである。したがって、いってみれば仏が修行して仏になるともいうべきであって、凡夫が修行して悟りを開き仏になるのではない。

修証についてのこうした考え方、これは子弟の教育について、教育というものは、子弟に対してその持っていない何ものかを与えるということではなくて、その子どものうちにある無限の可能性を引き出すことだとすれば、その理念と一致するものがあると考えられる。

そして、現実のすがたとしては、本来仏たるべき衆生も、無限の可能性をもつ子どもも、修行や教育が必要であり、そのためには本人の切なる意欲と正しい指導者がなければならない。この両者の緊密な融合によって、仏となり、人格の完成も得られるわけであるが、さらにまた本人の意欲の発動も正しい指導者の誘導にまつところが多い。

真の指導者の出現が期待されるゆえんであり、禅師はその著「学道用心集」の中で「正師を得ざれば学ばざるにしかず」とまで極言し、「それ正師とは年老耆宿を問はず、ただ正法を明らめて正師の印証を得るものなり、……行解相応するこれすなはち正師なり。」と述べている。行解相応すなはち、理論と実行、思想と実践のともなったほんとうの正師でなければ、真の指導者とはなり得ない。

人の師たるもの、三思すべきである。

（永昌寺住職）

給食

いまはむかし

●脱脂粉乳から味噌汁へ

戦後の学校給食は、占領軍の放出物資やララ物資の援助による脱脂ミルク給食から始まった。当初、脱脂粉乳を溶かすミルク攪拌器などあるはずがない。そこは、泡立て器を手にした校務員や先生たちの労力によったのである。さらに脱脂粉乳を煮る時は、かまどの所に付きっきりで蓋を開けたり閉めたりしなければならなかった。粉乳はすぐふいた。ふけば量が減る。しかも脱脂粉乳は、時々焦げたのであった。

児童ひとりにつき22グラムという規定量。物資不足の時節がら、抜き打ち監査には、ミルクの空かん一つにも目が光ったという。

まもなく市から味噌と醤油が配給され、給菜も開始された。日に三、四人の父母の奉仕を受けての味噌汁とすまし汁づくり。粗末な献立も、当時としては実にありがたいものであった。児童の持って来る野菜が白菜とか大根とかに集中した時、献立にどうやって変化をつけようかと係りの先生は、頭を痛めたという。

●A型給食から表彰へ

岩津小唄

この「岩津小唄」は、昭和十一年に作られたものである。

当時、岩津町長であった加藤錫太郎氏が、なんとか岩津町の名所を歌にしたいというお考えで当時安城農業試験場の技師であった岩月三公氏に依頼し、作詞、作曲をしてもらったということである。

一番から五番まで作っていただいたが、のちに六番を加藤氏がつけ加えられたものである。

この岩津小唄は、旧岩津町民の誇りである名所が、春夏秋冬の四季の中にうたいこまれ粋な節まわしで歌えるようになっている。この小唄には、町民の限りない名所への愛情と誇りがあふれているように思われる。作られた当時は、宴会などでも盛んに歌われたということである。

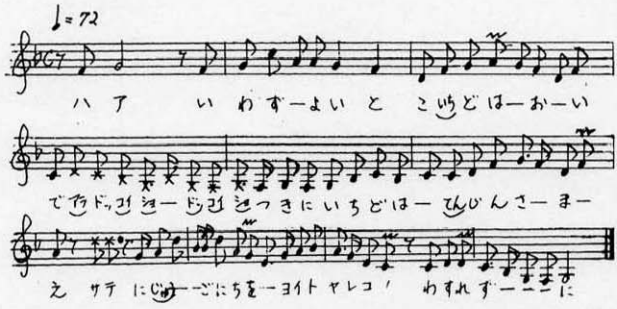
この岩津小唄が作られた昭和十一年には、名古屋の放送局まで行ってラジオの生放送で歌ったそうである。町の人々のよろこびは大へんだったと思われる。

その頃の日本はといえば、太平洋戦争への道を突き進んでいた時代である。にもかかわらずそんな暗いイメージなどは全くなく明るい、しかも素朴な感じがする歌である。ぜひ、この小唄を市民の歌としていきたいものだと願うのである。

（このお話は加藤錫太郎氏からお聞きしたものである。）

（現職教育音楽部）

岩津小唄



ふるさとのうた

一、ハア、
岩津よいとこ一度はおいで
「アラ　ドッコイショ」
月に一度は天神様へ「サテ」
二十五日を「ヨイトヤレコノ」
忘れずに

二、ハア、
春の眺めは村積山よ
「アラ　ドッコイショ」
風がくすぐりゃにっこり笑うて
「サテ」
やさし女神の「ヨイトヤレコノ」
片えくぼ

三、ハア、
夏の涼みは天神橋よ
「アラ　ドッコイショ」
水にちらちらあかしが浮けば「サテ」
どこで吹くやら「ヨイトヤレコノ」
笛の音

四、ハア、
秋のたけ狩りゃ八ッ木と岩津
「アラ　ドッコイショ」
連れて行かんせ真福寺まで「サテ」
お仁王様でも「ヨイトヤレコノ」
二人づれ

五、ハア、
冬の古城跡にこがらし吹けば
「アラ　ドッコイショ」
ゆめは昔の大樹寺でらの「サテ」
鐘の音色も「ヨイトヤレコノ」
なつかしや

六、ハア、
岩津よいとこ姫松小松
「アラ　ドッコイショ」
君を松山ただ青々と「サテ」
ぐちもいわずに「ヨイトヤレコノ」
しほらしや

昭26年、完全給食の開始。隣の子とじゃんけんで分け合った二つ山のパンの思い出。調理室の新築や改造に東奔西走した苦心談。それから七年後、三十一の小学校でA型給食が実現した。六ッ美ブロックの学校が、まだ岡崎市に編入されていなかった時のことである。

昭31年の第七回全国学校給食研究大会には、岡崎小、大樹寺小の両校が視察校として選ばれている。さらに昭36年には、岡崎小が文部大臣より学校給食優良校として表彰された。昭7年、同校が全国に先がけて、粗食児童約三十名に給食を開始したことを知る人は少ないであろう。

●中学校給食からセンターへ

昭46年、葵中の給食を皮切りに全市の中学校で完全給食が実施された。一番喜んだのは母親であり、それに比べて生徒たちの顔色はあまりさえなかったようである。その間に立つ先生たちは、環境づくり、習慣づくりに大変緊張し、先進校の葵中を相ついで訪れたという。

現在は、東部、北部の給食センターと単独校の三本立てで、全市三万人の給食がまかなわれている。学校給食の充実期にさしかかったといってもよかろう。

昭22年の脱脂粉乳の時代から現在まで、地道な給食の仕事にずっと取り組んでいる先生がいる。その先生が考案した「牛乳運搬箱」が、美合小の各教室で使用されるのも近々のことであるという。

（石川シイ・高木節子・鳥山幸夫先生のお話から）

伸びる

—緑の中で—

岡崎市民 歩け歩け大会

「体力づくり、岡崎市民歩け歩け大会」の大看板をかかげた公園河川敷は、緑色の学区表示を持った隊列で埋まった。

急ぎ足で歩くと汗ばむような、それでいて日射しの柔らかな初夏の朝、思い思いの服装の老若男女が、つぎからつぎと歩いてきた。各々約五キロメートルほどの行程を、四月二十八日(日)午前十時三十分の時限を見つめての、全市の蠢動である。

歩くことには　たのしさがある。
歩くことには　夢がある
……
歩くことには　しあわせがある
歩くこころに　歌がある

岡崎市消防音楽隊の演奏する「みんなで歩く行進曲」のリズムが、いつの間にか六〇〇〇余の大群衆のどよめきとなった。

「遠足のようだけど、ちょっとちがう」「歩きながら歌などうたったら、もっと楽しかった。」「天気がよかったので歩いたあと、花やいだ気になれた。」「どこから来た人か知らんけど、みんな同じ場所へ、同じように歩いてきたんだなと思うと、やあ、と自然に声をかけたくなる。」と。さまざまな感想をもらしながら大会行事は終わった。

くばられた市民スポーツ手帳や風船を持って、そのまま河川敷にい残り、昼食の弁当をひろげあう家族もある。

市の花である藤の香もたかくただよう公園の一日は、健康で明るい生活をめざした「岡崎市民歩け歩け大会」で終日いろどられた。

親子そろって 絵をかく会

豆画伯で足の踏み場もない動物園舎付近。わき目もふらず絵筆を動かしている定刻一時間前から、すでに公園内は一ぱいの人だかりだった。

四月二十八日（日）第十五回「親子そろって絵をかく会」が行なわれた。年々参加者が増加しており、今年は四千人を軽く突破したようだ。朝から雨が心配されたのだったが……！…。

この会も、岡崎市民の会として定着したようだ。

子ども側につきっきりのおとうさん、あれこれ教えている人もいる。寝ころんでいる人、幼い子をあやしているおかあさん。子どもとともに絵筆をとるおかあさんも多い。この会についての意見を聞いた。

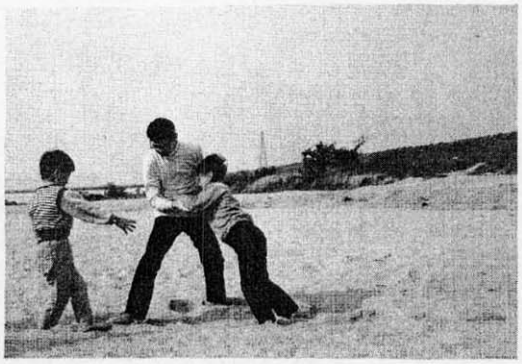
——子どもに大ぜいの中で描かせることは何よりもよい刺激です。これを機会にこれから毎年連れてこようと思いました。

——実は、家の子は一昨年佳作に入賞いたしました。思ってもいなかっただけに、家中大喜びでした。昨年は手伝ってやったために入賞できませんでした。親として反省しています。

——入選などは問題ではありません。この雰囲気が好きでたまりません。だから毎年くることにしています。

——おかあさんがたがかいてあるのを見て、私も道具を買いました。この作品は私の宝物です。だから返していただけないでしょうか。額に入れて残しておきたいのです。

終了は二時ごろ。父兄の作品約八十点。昨年の二倍にもなった。



ふんわりとした土の感触が靴底をなでる。山の落葉が土にかえり、水分を含んで柔かく弾んでいる。足どりも、思わず軽く、前へ前へとはじき出される。

ここ、桑谷山系遊歩道は、国民宿舎桑谷山荘と桑谷展望園地、扇子山園地とを結ぶ、全長一、九キロの自然歩道である。

自然の環境を損わぬよう、山の起伏のままに折れ曲がっている小道を、駆け上がり、駆け下るようにして通り過ぎる中学生の一団がある。地元、東海中学校の生徒であった。

わらび取りに来たものの、もう盛りを過ぎたらしく、山の幸は期待はずれであったらしい。そこで、自然歩道一周マラソンとしゃれたのだ。ゆっくりと緑の自然を楽しむこの散策コースも、若い彼らにとっては恰好の体育場となっている。

そういえば、市の計画として、ここに「森の体育場」が設置されるということだ。現在ある二つの園地と、木製ベンチを置いた十四か所の休憩所に、自然の立木やスロープを利用した「さかだち板」「平均台」「馬とび台」「坂登り」などを設けて、訪れた人々が気軽に運動できるようにするという。

自然に親しむ
桑谷山系遊歩道

大変魅力ある試みだ。さか立ちして見る紺碧の三河湾の眺めもおもしろい。ロープに身を任せて登るスロープも、ずいぶんとスリルがあることだろう。「馬とび台」も「平均台」も自然の立木を並べたものだ。自然の感触が、この山を訪れる人々への何よりの贈り物だ。

再び、あの若者たちが訪れたとき、山は新しい装いをこらして彼らを迎えることだろう。

連休を家族そろって

●山菜求めて山歩き

燃えるような新緑、澄みきった空気、ウグイスの鳴き声。Tさん一家は伊勢神峠付近で山菜取り。

ワラビ、ゼンマイ、フキ、サンショウの若芽と、山の幸はたっぷりある。二人の子どもたちは「こんなものが食べれるの？」と半信半疑。だがけっこう楽しそうにさがす。「これは高級料理だよ」とおばあさん。

このあと、地図を片手に東海自然歩道も歩く。〝清流に冷やして飲んだかんビールの味は忘られない〟とはおとうさん。

●太陽の下、食欲もりもり

学校の宿泊訓練で味をしめた長女の発案。Aさんの家族みんなで飯ごう炊事。所は五月晴れの矢作川原。

流木を拾い集めるのは子どもの役、なかなか火がつかない。風向きを考え、薪の乗せ方を工夫させ、どうしたらよく燃えるか教えるのはおとうさん。苦労してたき上がったごはんの味は格別、子どもたちの食欲も旺盛そのもの。

そのあとみんなでバレーボールや砂あそび、すもうなどで半日楽しんだ。

●白球を追って……だが

「こんな大きなラケットにどうしてうまく当たらんのかなあ……ハハハ」とおとうさん。庭球部にいる中学生の子どもに連れられて、Iさん一家は県営グランドで庭球の練習、というより庭球ごっこ。

ラケットにふり回されたり、ボール拾いに走ってばっかりだが、笑いが絶えない。

「今夜はサロンパスをはらなきゃ」と思いながらおかあさんもはりきって…。

加茂一揆のおはなし

愛知教育大学教授
布川清司氏

一揆の経過

天保七年九月二十一日の夜八時ごろ、松平村周辺の百姓七十名ばかりが一揆にたち上がりました。天保の飢饉、大暴風雨等で物価も上がり、生活が困難になっていたので、物価を下げてもらうために一揆を起こしたのでした。

人望の厚かった下河内村の松平辰蔵や柳助に協力を依頼し、二十名ばかりの百姓が一揆の相談をしました。

辰蔵が、「最近の物価上昇に対し、一揆でお願いすることにしたい。」と提案し、一同が賛成、二十一日の夜、七十名ばかりの百姓が滝脇に集まりました。ところが、地元の滝脇からは、だれも一揆に参加しなかったので、腹を立てた参加者が、庄屋の家を打ち壊したのを手はじめに、値下げに協力しない家々を、次々に壊したのでした。

一揆の起こったことを知った旗本、松平太郎左衛門が禁足令を出します。そのため、柳助は村から出られなくなりましたが、令を破って一揆に参加。一揆が過激にならぬように働いたのでした。

加茂の一揆の経過は、性格的に二つに分けられます。

前半は、打ち壊しでなくお願いする、つまり、値下げが聞き入れられれば打ち壊しをしないということです。後半は、打ち壊し本位ということになります。

頭取りの辰蔵は、前半しか関係しなかったのに、領主による鎮圧後、一揆の指導者ということで捕えられます。赤坂の陣屋で取り調べを受け、主だった者四名と共に、江戸送りとなります。

こうして、加茂、額田の町村数二四七、人数一万二、三千ほどをまきこんだ三河最大の加茂一揆も発生以後一年八か月を経た天保九年五月にすべてが終了したのでした。

歴史的意義

この一揆の歴史的意義として次の二つがあげられます。

一、一揆の結果、当時の待、商人、村役人が百姓に対する考え方を改めるようになった。

二、天保の改革のきっかけの一つとなった。

これらは、岡崎藩の措置や、水戸藩主、徳川斉昭が将軍に改革を建議したことなどから、うかがわれます。

民衆の思想

次に、一揆に参加した百姓たちがどのような意識のもとに行動したかを考えてみます。

特に封建為政者に対しての批判は厳しく、強い憎しみを持っていました。百姓たちは、〝為政者は百姓の生命を守る責任がある〟と考え、〝為政者の義務の要請〟をすることによって自分たちの要求を正当化しようとしたのです。いわば、なすべきことをしない為政者への抵抗でありました。だから、自分たちの乱暴も〝世直し神〟として正当化しているのです。

加茂一揆が全国的に有名であるのは、この理由からです。

松平辰蔵のこと

最後に、一揆を率いた松平辰蔵について触れてみます。

彼は、元来欲深く、賄路など取っていたとも言われています。しかし、土地の人から信望を得ていたことは、多くの記録が筆を揃えて記述しているところです。それは、次のような理由だったようです。

一、彼はこれまで争いごとを解決してきた実績がある。

二、破壊を恐れぬ行動力と義侠心が強い。

彼は領主の中根家と親戚でありました。苦しんでいる農民の姿を見て、自分なりにできる助力の方法を考えたのでしょう。それが義侠心となって表われたのだと思われます。

以上が加茂一揆のお話です。当時の百姓が持っていた精神は、今日の社会にもあらためて見なおされなくてはならないと考えられます。

（文責：葵中・高橋岩雄）

かがみ

年輪会

岩瀬米子

朝、職員室へはいったとたん、あちらこちらから「先生おめでとう。」と言われた。正面の黒板を見ると、「岩瀬先生お誕生日おめでとうございます。」と、達筆で一段と大きく書かれていた。きょう私の誕生日。

職員朝礼を手早くすまされると早速盛大な拍手の中で、当番の先生より赤いレイと、祝菓が贈られた。次にどこで調べられたか私のエピソード、主人の声など巧みにもり込んだユーモアたっぷりの祝詞をいただき背中は汗びっしょり。そのあと誕生日の歌の大合唱、しどろもどろの挨拶に三たび拍手がなって短時間ではあるが盛大に祝賀会は終わった。家庭での大切な行事の一つでありながら、古くなるとつい忘れ勝ちになるのに職場では、忙しい中にも時間を生み出し職員一同でお祝いする。ささいな心遣いが家庭的な温かい親しみのある雰囲気と、職員の結びつきを更に堅くするのが、この年輪会である。（城北中）

若い活気と魅力がいっぱい

―― 全市の十分の一は新しい先生 ――

岡崎市の新規採用教員は例年五十人前後だったのがことしは七十八名と多数。管外転入教員二十六名（ほとんどが二、三年経験者）、新規常勤講師五名と合わせると、岡崎全教師の十分の一を占めるほどで、どの学校も若い新鮮な活気が溢れている。各校の新任教師は次のとおり。

【小学校】五一名（男18女31）▽梅園＝山本良一、飯田和子▽根石＝梅原みちよ、藤井やよい、藤原裕子▽男川＝小栗美佐子▽美合＝近藤富子、三浦公子▽羽根＝金山恵子、清水清子、塚本洋子▽岡崎＝村上きよみ▽六名＝奥村陽子▽三島＝山田賛平、織田理知子、室伏柱子、吉田とも子▽連尺＝岩崎典彦、山田尚武、天野紗代子、神尾和子▽広幡＝安藤真好▽井田＝浅川幸子鈴木幸子▽福岡＝金田和美、山本京子▽竜谷＝小野田道代、角谷芳子▽藤川＝酒井理子▽山中＝倉橋勉▽本宿＝木村紗都江▽生平＝野々山宏司▽秦梨＝早川ひさ子▽常東＝村山喜美子▽恵田＝野勢明▽奥殿＝筒井善光▽細川＝高木隆尚▽岩津＝大岡久芳▽大樹寺＝酒井芳宏、木山登志子、山崎順子▽矢東＝中尾友則▽矢北＝板倉正子▽矢西＝柱川明子▽矢南＝野田義裕▽六中＝坂本英二、柴田ひろ子▽六北佐宗正義、斉藤操▽六南＝大内広和、岡本裕司

【中学校】二七名（男13女14）▽甲山＝杉浦恵美子▽美川＝杉山耕一、鈴木由郎、山本松宏▽南＝戸松良子▽竜海＝高橋孝三郎、林住依▽葵＝小林早苗、山田伸子▽城北＝田中忠康、水越和子▽東海＝榊原佳代子、細井明美、山西恵子▽河合＝脇田喜一、鈴木貴美子▽常磐＝太田邦子▽香山＝石田明道、都築功▽岩津＝酒井久男、野々山周次郎▽矢作＝木村敏夫、牧野重彦、柴田秀子、羽田真知子▽六ツ美＝園部安喜、荻野人美

■研究発表まず岩津中から

本年度研究発表校の発表時期の予定と研究主題は次のとおり。▽**六月**＝岩津中（読書指導）▽**九月**＝常磐小・常磐中（ふれあいによる個の育成）、矢作東小（考える子を育てる）、河合中（自然環境保全の教育活動）▽**十月**＝本宿小（社会科指導）常磐南小（小規模校の算数指導）常磐東小（小規模校の国語指導）恵田小（小規模校の理科指導）岩津小（からだづくり）▽**十一月**＝愛宕小（教育機器を活用した国語、理科学習）▽**一月**＝福岡小（ひとりひとりの能力を伸ばす指導）▽**二月**＝矢作西小（生涯教育の一環としての読書指導）　ほかに道徳教育全国大会（南中）と技術家庭科全国大会（分科会場竜海中）が十一月中に予定されている。

■カラービデオカメラの設置

竜城ライオンズクラブ（会長鈴木勝雄氏）から市教委へご寄贈いただけた、カラービデオカメラが、このほど納品されました。このカメラは、ソニー社の開発した最新のメカニズムによって、低照度の撮影条件であっても、鮮明なカラー映像が得られるすばらしいものです。

ビデオ教材の自作など、優れた性能の活用が期待されます。

【刊行あんない】

◇自我の壁―或る教師の記録―　板倉四郎著

新卒当時から今日まで、折々の機会に書きためた教育と人生の記録。信念を実践を赤裸々に克明に吐露していて全篇に著書の面目が躍如としている。B6判二六〇ページ　研文社刊

◇初明り　糟谷正孝著

とぎすまされた知性とさわやか感性で身辺の出来事、旅と自然、ふれ合った人々を語る五十七篇、随筆のもつ絶妙な魅力を多彩に放つ待望の書。B6判三五〇ページ研文社刊

●さくらまつり市民スポーツ大会中学の部成績

（4月6日～28日市内各会場）

種目			優勝	第2位	第3位
野球			城北	矢作	岩津・附属
ソフトボール			岩津	甲山	南・葵
ハンドボール	男		城北	六ツ美	美川・南
	女		六ツ美(A)	六ツ美(B)	岩津・常磐
バレーボール	男	1部	甲山	附属	城北・竜海
		2部	南	葵	城北・竜海
	女	1部	矢作	東海	福岡・葵
		2部	葵	福岡	矢作・城北
バスケットボール	男		美川	城北	矢作・附属
	女		美川	矢作	城北・甲山
剣道	男	1部	沓沢（常）	藪田（福）	楼井(城)・味岡(城)
		2部	近藤（福）	柴田（常）	加古(常)・広井(福)
	女		石原（甲）	田中（南）	小滝(城)・加藤(甲)
卓球	男		中根（矢）	石原（矢）	稲垣(矢)・内田(矢)
	女		梅村（東）	鈴木（矢）	大野(香)・菊地(香)
庭球	男		水越・深津（香山）	鈴木・森瀬（東海）	安達・樋口（福岡）成瀬・牧野（竜海）
	女		宇野・柴田（香山）	大塚・杉浦（南）	松下・井部（南）大河原・大原(美川)
備考			・剣道、卓球、庭球はいずれも個人戦の成績である。 ・バレーボール、剣道の部の区別はそれぞれ1部3年生、2部2年生を示す		

5月の行事

日	曜	行　　事
1	水	校務主任会（竜海中）
2	木	
3	金	憲法記念日
4	土	体育主任会（美川中）
5	日	こどもの日
6	月	休　日
7	火	定例教育委員会　新任教員研修会（男川小）
8	水	教務主任研修会（働く婦人会館）　羽根小校舎増築起工式　社会教育審議会（受護センター）
9	木	
10	金	教頭研修会（働く婦人会館）岡崎市福祉センター開所式
11	土	三河部小中校長会総会（勤労会館）
12	日	岡崎市植樹祭（竜美ケ丘）古文書の読み方講習会（城北公会堂）　第1回市民オリエンテーリング大会（東公園
13	月	故鳥居敬一生平小学校長学校葬
14	火	新任教員研修会（市図書館）
15	水	定例校長会（東部給食センター） 小学校バスケットボール実技講習会（連尺小）
16	木	教職員の研修に関する委員会（市役所）
17	金	岡崎の歌編集委員会　教研推進委員会（葵中）
18	土	県小中校長会総会
19	日	
20	月	
21	火	新任教員研修会（井田小） 市ＰＴＡ連絡協議会（婦人会館）
22	水	学校保健主事部会（東部給食センター） 森信三先生を囲む読書会（婦人会館）
23	木	教育委員学校訪問（三島小・六ツ美北小）
24	金	特殊教育推進協議会総会（連尺小）
25	土	岡崎公園を描く会表彰式（レオ７階）
26	日	歩く文化財めぐり（大樹寺ほか） 古文書の読み方講習会（城北公会堂）
27	月	
28	火	中学校職業指導協議会総会（安定所）
29	水	県教委学校訪問（山中小・本宿小）
30	木	市指導主事訪問（六ツ美中小）
31	金	市政だより子ども版編集委員会 現職教育推進打合せ会（市役所）

●表紙写真　**中根　洋**（南中）
●カット　**篠原　正**（葵中）

この本を

地球を考える（1，2）

小　松　左　京

新潮社　１３００円

地球は人類の急激な増加により、物質循環のバランスを乱した。人類は深刻な問題をかかえるようになった。現在をよりよく生きながら、未来にも責任を負うためには、どう問題を解決したらよいか。人類の英知は、どこまでこれに応えることができるだろうか。著者は、各界第一線の学者と対談する。科学と哲学が新しい立場で結びつき、広い視野で物を考えさせてくれる。　（秦梨小　野村正己）

'７４民力

朝日新聞社編

朝日新聞社　１５００円

「民力」とは、生産消費、文化など国民のもつエネルギーを総合的にとらえ、それを都道府県の視点から集約したもののことである。いわば、国民生活のあらゆる分野にわたる統計資料である。日常生活に直接関係する資料がふんだんに盛られている。したがって、単なる統計資料ではない。その統計は多くを語りかける。自己の生活を再認識するための指標ともなる。　（常磐中　福応謙一）

寸言

万緑の中や吾子の歯生え初むる　草田男

歩く姿で年齢がわかる。歩け、走れ、跳べ、緑の中に生きる子どもたち。

「あのう、家の子は……。」はずかしそうな母の顔。はずかしいのはむしろ担任の方なのだが。――家庭訪問での話。

植えることは簡単だ。育てることはむずかしい。――いのちあるものを、木も子どもたちも。